

脳死と臨死体験の記憶

斉藤 忠資

臨死体験があくまでも脳の特殊な活動によるものであれば、脳死の場合には生じることはないと思われる。もし脳死が確定している患者に、臨死体験が生じているのであれば、臨死体験は脳の異常な活動によって引き起こされる意識現象ではなく、脳から独立した通常の意識を超えた意識現象ということになろう。最近脳死が確定されている臨死体験の例が欧米の医師たちによって報告されている。そこで以下そのような事例を考察してみよう。

I Dr.M.Sabom による事例

心臓専門医 M.Sabom は、脳死が確定された患者の臨死体験の例を詳細に報告している。Pam Reynolds という 35 歳のアメリカの女性は、脳の大きな基底部の動脈瘤の手術のために 90 分間全身麻酔を施されていて、血圧はなく呼吸と心拍が停止し、脳波はフラットで血流はこの女性の脳からなくなっていた。1) 脳波がフラットということは大脳皮質の機能が停止していたことを意味している。さらに両耳につけた ear speakers が、脳幹の機能が完全に停止していたことを示していた。2) 時間的には 55 分間この患者の脳幹と心臓の機能が停止し、35 分間彼女の脳から血流がなくなった状態になっていた。3) 以上のことが確認されている間に、この女性は典型的な深い臨死体験をしていた。4) 彼女は自己意識が頭頂部から引っ張り出されて体外離脱し、手術室の様子を上から見下ろし、その後渦巻き状のトンネルの中に吸い込まれ、トンネルを通過すると、その先に光があったという。その光の中で死んだ祖母と死んだ Gone おじさんと grea great おばさんの死んだ Maggie と死んだ祖父に出会ったと述べている。5) 彼女の臨死体験には、科学的に説明がつかない点がある。この患者は両耳に ear speakers を取り付けられていたので、何も聞くことができなかつたにもかかわらず、自己意識が体外離脱したのちに、手術をしていた女医が“この患者の動脈と静脈はとても小さい”という声を聴いた。この女医に確認を取ると自分の言った内容と一致していると証言している。またこの患者は、自分の頭蓋骨を切るノコギリの音を聞いている。6) この患者はそれまで骨用ノコギリを一度も見たことがないにもかかわらず、体外離脱中にその骨用ノコギリを上から見て、それが交換可能な刃つきの電動歯ブラシに似ていて、その刃がソケットレンチケースに保管されていたのを見たと言っているが、その内容は完全に正確であった。7) さらに脳の手術のために、この患者の頭の毛は切られていたが、彼女は自分の頭の毛がすべて切られていると思っていたのに、体外離脱中に上から自分の頭の毛を見るとそうではなかったので、奇妙な刈り方だと思ったと言っている。8) 実際彼女な頭の毛は全部切り取られたのではなく、一部は切り取られずに残っていたのである。この女性は暗いトンネルを通過して再び自分の肉体に戻

る直前にも、再度自分の身体を上から見ている。9) 自分の身体を身体の外から見るということは通常ではありえないことであろう。これはドッペルゲンガー（分身）とは違う。ドッペルゲンガーの場合には、私という主体はあくまでも生きている身体のほうにあり、もう一人の自分を影のように見るのにたいして、体外離脱の場合には私という主体が自分の身体の外から自分の身体を見るのである。

II Dr.Sam Parnia のチームによる調査

Sam Parnia(イギリスの Southampton General Hospital の医師)のチームは、臨床死（心拍停止、呼吸停止、瞳孔散大）と判定されたのちに蘇生した63名の患者中56名は、臨死中の記憶がなく、7名は臨床死中の記憶があり、そのうち4名は脳死と判定された後の臨死体験の記憶を持っていた事実を突き止め、脳死状態でも意識が活動していることが判明したと研究結果を発表している。また臨死体験は薬や酸素や二酸化炭素が原因で生じるという証拠はなかったとしている。(10) 心拍が停止すると、血流がなくなり、血圧が低下して、脳波計がフラットになり、さらに呼吸も停止しているので、脳幹の機能も停止し、大脳皮質も機能停止状態になる。脳幹機能も失われると、明晰な意識と思考活動と記憶の形成が不可能になる。このような脳の状態の時には、明晰で秩序だった意識現象と記憶は生じない。げんに臨死体験の記憶を全く持っていない人が多い。(11)

P.Fenwickによると、意識がなければ脳波モデルを形成することができない。このシステムが壊れると、脳もモデルも混乱状態になり、昏睡状態に陥る。また意識なしには脳は記憶の形成は不可能である。仮に意識のないときに、脳が意識体験を形成できたとしても、この体験を後から思い出すことはできない。(12) そのような脳の状態にもかかわらず、臨死体験のような通常よりも知覚がアップしたハイパーリアルな至高体験が生じるのはなぜか？またその記憶がその後鮮明に残り、長年たっても薄れないのはなぜか、という疑問が当然生じる。

Sam Parnia たちによると、意識を失う直前と、意識を回復した直後の記憶を、臨死中の記憶と取り違えているのではないかという反論は正しくはない。その理由は、発作や事故を起こした人は、意識を失う直前と意識を喪失した直後のことを記憶していないからである。通常は数時間から数日間の記憶の空白がみられるという。心肺停止は脳の機能を完全に停止させるので、心拍停止直前と心拍停止直後の記憶はないのが通常である。にもかかわらず臨死体験者たちは、臨床死中の記憶を保持していたと述べている。また P.Fenwick は、脳が混乱状態を経て意識を回復するので、意識が回復するときに臨死体験のような明晰で秩序だった意識状態を生じるとは考えられないという。(13) Fenwick はさらに、頭部に損傷を負った患者の場合には事故の直前の記憶を消し去れことがあり(14)、また意識が回復するときの混乱した記憶はないと指摘している。(15)

以上の調査の結果、Sam Parnia たちは、人間の脳が機能を停止しても、意識が何らかの仕

方で脳とは独立して存続することが判明したとしている。(16)

Ⅲ 脳損傷の事例

脳が重傷を負った場合には、脳の機能が大混乱状態に陥っているので、明晰で秩序だった臨死体験を持つことも、その記憶がその後にも鮮明に残ることもあり得ないことである。

(17) にもかかわらず、そのような臨死体験の事例が見つかっている。そのような典型的な例を以下あげてみよう。

- ① Michael は1990年7月17歳の時、自動車事故で脳に重傷を負い、3か月昏睡状態に陥った。脳に重傷を負ったのにもかかわらず、臨死体験のことを鮮明に記憶しているのは不可解である。事故から昏睡状態中のことは臨死体験以外には一切記憶がない。(18)
- ② Ms.Drury は1983年10月32歳の時夫に lump hammer でおそわれ、頭がい骨が割れて、呼吸と心拍が停止し、意識を失った。4日後に意識が戻ったが、意識を失っていた間のことは全く記憶がない。その間に臨死体験をし臨死体験の記憶だけは鮮明に残っている。(19)
- ③ Dr.Rene Turney は、1982年2月24日車で帰宅中、交差点で信号待ちをしていたところで、記憶がなくなる。同乗者によると、信号が青になったので交差点に入った時、道路上の水で滑って、車は頑丈な柱に衝突した。脳の基底部と前頭葉がつぶれ、脳硬膜に6つの穴が開き、ハンドルの軸と方向指示器が喉から口の中と、右の上下胸腔に貫通。一回目の昏睡状態中に臨死体験をした。頭を先にして黒い沸騰する雲のような暗い大渦巻を通過。その先には小さな光があり、次第に大きくなる。白衣を着た人から光が発し、知恵と愛と安らぎを感じる。この光からその白衣が作られている。他人をいかに傷つけたか、いかに愛を行ったかという視点から人生再検査が行われる。死んだ祖父が、祖母が間もなくここに来るというので、祖母は故郷のマンチェスターから、ニュージーランドとマイアミに毎夏旅行することになっているのに、どうしてここに来るのかと聞くと、祖父は祖母が腸のがんのためにここに間もなく来るという。祖母は三か月後に診断を受け八月に死去した。このことを意識が回復したときに母に言うと、母はどうしてそのことが分かったのかとって大変驚いた。最初のあった人が私に”やるべき仕事があるから、戻らねばならない” といった。私はそこにとどまりたかったが、境目の中に送られ、すべてが空白状態になった。数日後昏睡から徐々に目覚める。記憶がボンヤリと断片的に戻ってくる。五年間ゾンビ状態だったが、臨死体験の記憶は、昨日のことよりももっとリアルである。(20)
- ④ S.Swanson は自動車に跳ねられ重度の頭部損傷を負い、30年間の記憶を失い、体が回復するのに9年間かかる。臨床死の間に体外離脱して、自分を車で敷いた男を

上から見る。自分の肉体が車のほうに倒れこんでいるのを見る。さらに一人の警官と第3の男を見る。なぜ第3の男が現場にいるのかわからなかったが、事故から約8か月後に確かに第3の男が現場にいたことが判明した。その後暗いトンネルをローラーコウスターに乗っているように通過、トンネルに先には白い光の野原があり、そこで10年前に死んだ祖母に会う。そこにはエネルギーの形のおおくの霊がいた。イエスが無条件の愛を放っていた。彼らとは互いにテレパシーでコミュニケーションした。過去と未来と現在の多くの知識を得た。多くに次元の世界を見た。人生再検査の時には自分の言行が相手にどのような影響を及ぼしたかが分かった。戻りたくなかったが、暗いところを通過して戻された。(21)

- ⑤ 15歳の少年が自転車に乗っていたところを、トラックに跳ねられて、広範囲の脳損傷を負い3週間昏睡状態に陥り死にかかると。その間に体外離脱し、トンネルを通過し、父方と母方の祖父母に会う。父方の祖母は早死にしたので会うのはこの時が初めてである。神に“まだ死ぬ時ではないから戻るように”と言われたので、この少年はがっかりしたという。(22)
- ⑥ David B.Stevens は1959年12月自動車事故で、頭部と首と内臓を損傷。昏睡状態になり5週間反応がなかった。右大脳半球の裂傷と打撲傷を含む脳損傷とわかる。記憶の短いつぎはぎを除けば、事故後最初の記憶が戻るのは1960年3月ごろになってからで、その間の記憶は事故と病院を含めて一切ない。記憶が回復した後も短期記憶は機能せず、尋ねたこともその答えも記憶されなかった。最初の内容を記憶していなので、長い間30分テレビを見ることもできなかった。昏睡状態に陥った時に、通常とは別の意識状態があったという。そこには時間がなく、完全な知識と完全な安らぎと愛があり、すべてのことを理解できたという。(23)
- ⑦ S.Mendes は自動車事故で頭を窓に打ち付ける。脳震盪による損傷のために、事故の記憶はない。3日間ICUにいたときのことはほんのわずかしき思い出せない。体外離脱して、自分の肉体を見下ろした。看護師たちが動き回っているのが見えた。その後暗いトンネルを通ると先には白衣を着た人がいて、テレパシーでコミュニケーションした。死んだ友人や家族と再会した。戻るように言われ、トンネルを通過して戻った。(24)
- ⑧ J.Metzger は自動車事故が原因で取り消しのできない脳傷害を負い、再び話すことができなくなる。2か月間意識がなかった。記憶を引き出すことは不可能で、自分の名前とアイデンティティの記憶もなかった。この間に臨死体験をした。霊と魂とともに生きているという実感はなく、自分の内を流れる黄金のエネルギー(命)を感じた。現在の自分とは別の仕方では死後も生きることが分かった。そこには体も思考もなく、目のように見ることもなく、内部と外部の違いもない。絶対的なものとの一体感があり、時間と空間の制約から自由になり、美がすべてを包んでいた。(25)

- ⑨ **Derry** は自動車時事故が原因で外傷的頭部傷害を負う。脳に凝血ができたために救急治療室に運ばれる。事故から三週間目に昏睡から目覚める。呼吸が停止したために、二週間人工呼吸器をつける。事故のことは全く記憶にない。昏睡から目覚めたとき、昏睡中の臨死体験を思い出す。病室の上から自分の肉体を見た記憶がある。自分は光が至る所にある世界にいる。光は自分の手を通り抜け、自分の手は透明だった。イエスと出会った。(イエスは自分から名乗る必要はなく、イエスとすぐに分かった。)二人で美しい園を空中浮動した。すべてのものが輝いていた。植物と水は内部から輝いていた。水は音楽を奏でていた。水を手ですくったが、水は手からすり抜け、手は濡れていなかった。イエスとは言葉なしでコミュニケーションした。イエスは愛と安らぎと配慮を私に注ぎ、私の喜びになった。イエスは親しい兄弟であり、友であった。(26)
- ⑩ **Brad Shingler** は自動車事故が原因で頭部損傷を負い、二日間昏睡状態に陥った。事故については全く記憶にない。事故以前の多くの主な出来事も思い出せない。昏睡中に体外離脱をして、自分のベッドの両サイドに二人の姉妹が立っているのを上から見下ろす。二人は死なないようにと私に呼びかけている。短期の記憶力の大幅な低下のためにリハビリに丸二年かかった。(27)
- ⑪ **J.B.Noble** は自動車事故が原因で脳傷害を負う。病院で医師たちが話し合っているのがおぼえている最後の事柄で、その後完全に意識がなくなる。(約三日間)仕事上の知識を喪失したために解雇される。意識を喪失しているときに、自分の霊が肉体から離れていくのが分かった。その後数秒間自分の肉体を下に見た。その後猛スピードでトンネルを通過した。トンネルの先の光にはこの世界より高い領域があり、そこでは未来のを知ることができた。コミュニケーションには言葉はいらなかった。この美しい世界には黄金の光があり、無条件の愛が最も強い力であった。そこには自己のコアの真のホームがあった。(28)
- ⑫ **D.Verdegaal** は心臓発作が原因で心拍が30分間停止し、二週間昏睡状態が続いた。昏睡中はもちろん意識が回復した直後も目が見えず、マヒ状態が続いた。発作が原因で大脳皮質を広範囲にやられていたためである。見えなくなったのは心拍停止による血圧の低下が原因である。分水界域と呼ばれる脳の部位は、血圧の低下によって破壊され見えなくなる。彼は脳の記憶の部位もやられていたので、記憶を形成できたとしても、不鮮明でランダムで断片的なものでしかないはずである。またその記憶を後から思い出すことはないはずである。しかし彼は昏睡中に鮮明で首尾一貫した臨死体験をし、その記憶を保持している。仮に臨死体験が酸欠で脳がやられる前に、心臓発作直後の数秒間に生じたとしても、臨死体験を思い出すことはない。彼は視覚をつかさどる脳の部位を破壊されていたので、意識が回復した直後に臨死体験したとしても、視覚をとまなう臨死体験はできなかつたはずであるが、彼の臨死体験は視覚的である。(29)

- ⑬ 鈴木秀子は階段から落ちて、意識不明となった。その前後のことは全く記憶にないが、命そのものの光による至福感の臨死体験だけはその後も鮮明に記憶が残っており、臨死体験の時には、知覚も思考もこの上なく生き生きと冴えわたっていたという。(30)

IV Dr.Pim van Lommel のチームによる調査

オランダの心臓専門医 Pim van Lommel のチームは、呼吸と心拍が停止し意識が喪失し、脳波計がフラットになり脳幹の機能が停止した（固定瞳孔散大と咽頭反射なし）のち蘇生した344名の患者のうち62名（18%）が臨死体験をしており、そのうち41名（12%）が臨死体験の中核要素を体験していることを確認した。（31）臨床死時の臨死体験の記憶を持つ人（18%）と臨死体験の記憶のない人（82%）の間には、薬の投与や酸欠といった生理学上の違いはなかった。また心臓発作は突然襲うので死の恐怖は予感できないので、心理学上の違いはないから、これらが原因ならば全員に臨死体験が生ずるはずなのに、実際には18%の人にしか生じていない点から見て、薬の投与や酸欠といった生理学上の根拠や死への恐怖といった心理学上の理由が、臨死体験の原因には考えられないとしている。（32）

また次のような臨死体験の事例を報告している。44歳の男性が心拍停止して心肺蘇生術が施された。ある看護師がチューブを口に入れて人工呼吸を行うために、この男性の義歯を外して、**crash car** に入れた。一時間後に心拍と血圧が戻ったが、再び昏睡状態になり集中治療室で人工呼吸をつづけた。この看護師が一週間以上たった後にこの男と心臓病棟で会うと、彼は“あなたは私の義歯をはずして、**crash car** に入れた。そこはピンがあり、下にスライドする引き出しがついていて、あなたはそこに義歯をいれた。”と正確に言い当てたので、その看護師は驚いた。この患者は上からベッドに横たわっている自分の肉体を見、心肺蘇生術で忙しくしている医師たちと看護師たちを見たという。また彼は蘇生が行われた病室の細部とそこにいた人々の様子を正確に言い当てたという。（33）

臨死体験の内容は、陽性感情（56%）、死んだことにきずく（50%）、死者と会う（32%）、トンネルを通過（31%）、超自然的風景（29%）、体外離脱（24%）、光と出会い（23%）、美しい色（23%）、人生再検査（13%）、バリア（8%）である。（34）この調査は脳波計がフラットで、人間の脳が活動を停止しても、知覚認知感情記憶を含む意識活動が存続していること、また脳から独立した意識が存在している可能性があることも示している。（35）Pim van Lommel は上記の心拍停止から蘇生した賢者に二年後と八年後に事後調査をした結果、臨死体験をした人は全員、臨死体験の記憶を正確に保持していることが判明した。（36）また事後調査でも臨死体験をした18%の人は臨死体験をしなかった82%の人よりも、死後の生を信じる傾向が強化され、人生に意味を感じ、他者への配慮とスピリチュアリティが増大する傾向があることが確認された。（37）この

ことは臨死体験の事後効果は、夢とは違って長年にわたって持続するものであることを示している。

V 考察のまとめ

以上の脳死のケースを中心に臨死体験の事例について検討してきたが、最後に考察をまとめてみよう。

- ① 脳死が確定された場合でも、臨死体験が発生していることが判明した。したがって臨死体験を死に行く脳の異常活動とすることはできない。また事故などで脳を損傷した人の場合には、臨床死の間と事故の直前の記憶はないが、臨死体験だけは臨床死中の記憶が鮮明な仕方で、内容も一貫性を持って、長年保持されていることが確認された。これらの点は脳とは独立した通常の意識を超えた意識現象が存在することを示している。臨死体験者の証言によれば自己意識が脳から体外離脱をする。自己意識が脳と肉体をこえる意識にシフトするのであれば、脳死後も脳から独立した超意識が存在する可能性がある。この宇宙意識は時間と空間を超え（非局所）自己アイデンティティは保持している。また肉体の脳よりもハイレベルの知覚思考記憶能力や無条件の愛や心の安らぎや歓喜や完全な知識や美や調和を備えている。
- ② Pim van Lommel と Sam Parnia は、意識が脳から独立できることを、テレビの例を用いて説明している。テレビの受信機に移る映像は、テレビ局が送信する電波の中にあるのであって、テレビの受信機の中にあるわけではない。電源を切ればテレビの映像は消えるが、映像を生み出すプログラムは大気中の電波の中に存在している。同様に脳は意識を生み出す器官ではなく、受信機であり脳とは独立して意識は存在しているのではないかと提案している。(38) 脳から独立して存在する意識の科学的可能性については今後考察されねばならない。
- ③ 臨死体験が肉親や知人との再会や人生再検査を含んでいる場合には、脳による記憶が関係しているものと思われる。なぜならば肉親や知人の記憶がなければ、その人物と判定できないからである。自己意識は肉体時の記憶を保持したまま体外離脱するのであれば、肉親や知人を認識することも、人生再検査も可能であろう。また体外離脱後脳から独立した状態で臨死体験が起こるのであれば、脳死状態や脳が損傷している場合でも、脳を超えた超意識が臨死体験の記憶を形成し、その記憶を脳にとどめるならば、臨死体験の記憶はその後も鮮明な仕方で残ることは可能であろう。もっとも臨死体験の事例の中には、生前は全く知らなかった先祖にあった場合でも、すぐにその人とわかったというケースが報告されている点から考えると、脳による記憶がなくても人物の判定はできるかもしれない。この可能性が否定できなものは、臨死体験者はその時はソウルファミリー全員と完全に理解しあうことができたと言っている人が多いからである。しかしその場合でも人生再検査には肉体時の脳の記憶が不可欠であろう。

- ④ 臨死体験は側頭葉てんかんであるという説があるが、M.Sabom はすでに検討した Pam Reynolds が臨死体験をした時間帯には脳波計は何の発作も示していなかった点と、バルビレートで保護されたこの患者の脳が、そのような発作を起こすことは極めてありえないことだと証言している点を挙げている。(39) また内側頭葉を含む放電は、発作中の事象の記憶を消去してしまうので、多くの場合その間の記憶はない。(40) それに対して臨死体験の記憶は長年にわたって鮮明な仕方で保持されるのである。

Pim van Lommelによると、側頭葉てんかん、脳の電気刺激、脳の高炭酸ガス症、大脳皮質の低酸素症、過度呼吸、エンドルフィン、エンケファリン、セロトニン、ケタミン、LSD、メスカリンは、臨死体験と似た要素を引き起こすが、断片的でランダムであり、臨死体験のような深い意味と一貫性を持っていないし、精神上の変容と死に対する恐れ
の消失を生じることがまれである。(41)

- ⑤ 脳に記憶が蓄積されるのか、脳を超えたところ蓄積されるのかについては議論が分かれている。例えば R.Sheldrake の形態形成場がその一例である。臨死体験の場合は脳を超えた宇宙意識が宇宙全体の全情報を保持している。光の世界では脳と肉体は超えているが、臨死体験者の意識は、自分の肉体と物質の世界との結びつきを保持している
ので、再び自分の肉体に戻ることができる。臨死体験の記憶はその後鮮明に残るのであるから、
脳の記憶のメカニズムが関与していることは確かであろう。

引用文献

- 1) M.Sabom,Light and Death,p.35,Zondervan Publishing House,1998
- 2) 同書,49
- 3) 同書、43~46
- 4) 同書、,27
- 5) 同書、41~46
- 6) 同書、41.184~185
- 7) 同書、186~189
- 8) 同書、41
- 9) 同書、41
- 10) Sam Parnia,D.G.Waller,R.Yeats,P.Fenwick:A.qualitative and quantitative study of incidence,features and aethiology of near death experiences in cardiac arrest survivors,Resuscitation 48,149~156,2001
- 11) Sam Parnia,Near Death Experiences in Cardiac Arrest and The mystery of Consciousness,www.datadiwan.de/Su'Med Net/library/articlesN75+/N76Parnia-nde.htm
- 12) Peter & Elizabeth Fenwick,The Thruth in the Light,296~297,Headline,1996:P.Fenwick,Is the near-death experience only

- N-Methyl-D Aspartate Blocking? Journal of Near Death Studies 16,45~46,1997
- 13) P.Fenwick, Blocking? 45~46.
 - 14) Peter & Elizabeth Fenwick, The Truth,73
 - 15) P.Fenwick, Blocking? 45~46
 - 16) Sam Parnia, Cardiac Arrest,2
 - 17) D.Zohar, Through The Time Barrir,154,Heinemann:London,1982
 - 18) Peter & Elithabeth Fenwick,The Truth,180~182
 - 19) 同書,168~171
 - 20) www.angeltire.com/hr/reneinnz/nde.html
 - 21) <http://realitycenter.bravepages.com/ndeacc24.html>
 - 22) <http://home.swipnet.se/NDU/enbackground.htm>
 - 23) <http://tbichat.org/stories/dave-S2.htm>
 - 24) A Journey to the Light, <http://home.att.net/Ishmad-ix/nde.htm>
 - 25) <http://www.wisdomtalk.org/jm-ivwz.html>
 - 269 Derry'sNDE.<http://nderf.org/derry'snde.htm>
 - 27) <http://www.lodinews.com/dui/html/kegel.shtml>
 - 28) <http://www.planetlightworker.com./articlefarm/bjnobel/article.htm>
 - 29) Peter & Elizabeth Fenwick,The Truth,298~302
 - 30) 神は人を何処に導くのか、13~21,クレスト社、1995
 - 31) Pim van Lommel,Rund van Wees,Vincent Meyers,Ingrid Elfferich,Near-death experience in survivors of cardiac arrest:a prospective study in the Netherlands,Lancet,358,2039~45,2001;同じ著者たちによる The merkawah research on near-death experience:A prospective study of 344 servivors of cardiac arrest,<http://users.pandra.be/linen/indeurope/articles/artmerkres.html>
 - 32) Merkawah,3.4.5.8.9
 - 33) Lancet
 - 34) 31)と同じ
 - 35) M.Howe,Interview with Lommel,www.earthfiles.com/erath.311.htm. p.3
 - 36) Merkawah,4~5
 - 37) Merkawah,4~5;Interview,4
 - 38) Sam parnia:[www.sun-sentinel.com/news/nationworld/sfl628 brain,story](http://www.sun-sentinel.com/news/nationworld/sfl628%20brain%20story);Pim van Lommel:Vital Signes,vol.21no.1,p.16,20002;
[www.yes.net/users/reversesprins/out of body.html.p2](http://www.yes.net/users/reversesprins/out%20of%20body.html.p2);
www.scriptcache.de/unglaublichkeiten/natodursachekrischick.html
 - 39) M.Sabom,Light,184
 - 40) P.Fenwick,Blocking,18

41) Merkawah,8